

## 第39回文化講座

# 発掘調査速報 2010 その2

【日時】 8月14日（土） 13：30～16：15

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

## 第 39 回文化講座「発掘調査速報 2010 その 2」

平成 22 年 8 月 14 日（土） 午後 1 時 30 分～4 時 15 分

あいさつ	沖縄県立埋蔵文化財センター所長 守内泰三
大保川上流域の生産遺跡群	片桐 千亜紀 ..... 1
普天間古集落遺跡ほか	知念 隆博 ..... 9

\* \* \* \* \* \* \* 休憩 \* \* \* \* \* \*

宮国元島上方古墓群発掘調査の概要	西銘 章 ..... 12
基地内文化財分布調査の成果	中山 晋 ..... 15

\* \* \* \* \* \* \* 質疑応答 \* \* \* \* \* \*

# 大保川上流域の生産遺跡群

調査班 片桐 千亜紀

## 1. はじめに

大保川上流域の生産遺跡群は、大保ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査によって発見された生産遺跡群である。調査は大宜味村教育委員会が主体となり、沖縄県立埋蔵文化財センター、沖縄県教育庁文化課が指導をしつつ実施した。

発掘調査・資料整理・報告書の刊行によって当該時期の大宜味村における山の利用の実態の一端が明らかになった。

## 2. 遺跡群の位置

沖縄県大宜味村大保川上流

調査対象面積 69,300 m<sup>2</sup>

## 3. 調査期間

第一次調査 2008年11月～2009年3月（1号～5号炭焼窯）

第二次調査 2009年11月～2010年3月（エキス窯）

## 4. 分布状況

大保川上流域には炭焼窯を中心として無数の生産遺跡が、川の本流及び支流の沢沿いに点々と所在することが確認された。所在の記録を取ったものだけで17基あり、その内ダムの建設によって水没が確定した5基の炭焼窯と1基のエキス窯について調査を実施した。

窯が構築される場所は大きく分けて2通りある。一つは川が形成されている谷傾斜面の上部高地に位置するもので、本流及び支流からは20m以上の距離がある。もう一つは川沿いに位置するもので、川筋から5m～10m程度のごく近い場所となっている。今回の調査対象としたものは、後者の低い場所に構築されたものである。

## 5. 調査成果

二次にわたる発掘調査で、4基の炭焼窯（1・3～5号）については清掃と簡易測量を実施、保存状態が良好であった2号炭焼窯とエキス窯については、詳細な記録保存を実施した。特に2号炭焼窯は発掘調査成果にもとづいて、実際に使用できるよう復元整備され、今後は教育普及活動に貢献することとなった。

### （1）2号炭焼窯

炭焼窯と周辺設備は谷の斜面地に構築される。切土、盛土を効率よく行っている。天井部が完全な状態で保存されており、貴重な例であった。ビール瓶の製造年代から考えると20世紀初頭には操業していたと考えられる。

炭焼窯規格 全 長：5 m  
全 幅：4.5m  
高 さ：1.8m  
焚 口：幅 0.35m、高さ 0.65m  
炭化室：全長 4 m、幅 2.25m  
煙 道：3 基  
排水溝：底面に 1 本  
敷 石：炭焼窯周囲に歩行通路として設置  
階 段：窯左側、斜面を成形して構築

周辺施設 平場施設 1：4 m × 3 m の平場。竈。多数の遺物が散布。小屋の可能性。  
平場施設 2：4 m × 2 m の平場。溝。トイレの可能性。  
竈 : 1 基（平場施設 1 に付随）  
その他平場：窯周辺の斜面に 5ヶ所。作業場。  
古 道：尾根から窯へ至る道。蛇行する。

遺 物 ビール瓶（「帝国麦酒株式会社」「大日本麦酒株式会社」「日本麦酒株式会社」）  
沖縄産陶器、近現代磁器、硯、鏡など

## （2）エキス窯

調査対象地の最奥部、最も険しい場所で炭焼窯と異なる形態を持つ窯が確認された。3つ炊口と6つの開口部を有し、それらが連結して1本の煙突へと導かれる。当初は樟腦等を精製する蒸留釜と考えたが、発掘調査の結果、蒸留施設が確認されなかつたため、染料を煮出すためのエキス窯と考えられるようになった。川沿いに位置し、谷の斜面部を大規模に切り土して広大な作業場と窯を構築している。

エキス窯規格 全 長：14m  
全 幅：6 m  
焚 口：3 基  
開口部：6 基  
煙 突：1 基

周辺施設 平場：9基  
竈 : 1 基（平場 1 に付随）

遺 物 多量のロストル、沖縄産陶器、近現代磁器

## 6.まとめと課題

沖縄県は海を重要な資源とし、糧として生業を営む地域だと思っていた。しかし、山間部における生産遺跡群の調査をとおして、その考えは改めることになった。山原の森奥深くには現在もおびただしい量の生産遺跡が残されているからだ。

大宜味村の近世・近代を物語る上で、林業はかかすことのできない重要な要素である。その実態の一端が今回の生産遺跡群の調査によって明らかとなった。

天井まで完全に残されていた2号炭焼窯は記録保存後、別の場所で復元され、今後の教育普及活動に役立てられるだろう。過去の林業に対する村民の意識が高いことが現れている。

地方分権が進む現在、地域独特の文化を掘り起こしアイデンティティーを再構築する努力を払う必要がでてきた。大宜味村にとっては、今回の調査成果や現在も山間部に残る生産遺跡群は、「過去を復元して村の特徴を如実に物語ることができる重要な資料となるはず」である。

しかし、生産遺跡の調査には課題が多い。二次調査で実施したエキス窯はその規模の大きさ、複雑な構造を解明し、先人達の知識に触ることはできたが、その機能については明確な答えを出すことはできなかった。染料を煮出す窯という評価が正しいとしても、何故、このように険しい場所で操業していたのか。何故、鍋を置く開口部が6つも設置されていたのか。斜面を切り土して整えた広大な平場では何をやっていたのか。操業終了から、わずか数十年の時を経ただけでこれほど知識が失われることには驚きを隠せない。我々の世代にはすでに引き継がれていない「山原の暮らし」がいかに多いのか思い知らされた。当然、発掘調査のみでは過去の山原の暮らしを復元することは不可能である。今後、文献や聞き取り調査を充実させることで、失われた山原の暮らしを復元していく必要がある。



大保川上流域の景観 生産遺跡への道

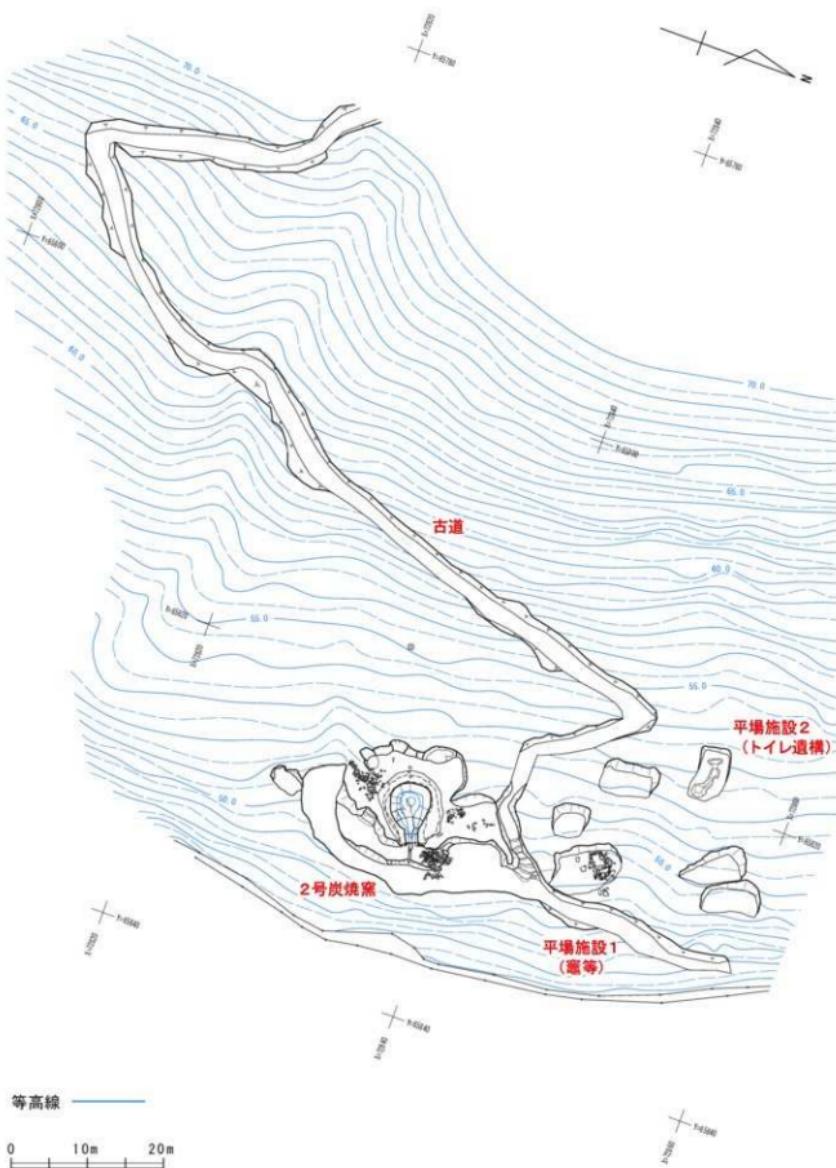
第1図 大宜味村及び調査位置



図版1 大宜味ダム上流部度検査・蒸留率分布状況



第2図 大宜味ダム上流部度検査・蒸留率分布状況



第 10 図 2号炭焼窯及び周辺施設全体



2号炭焼窯 正面 天井が完全な形態をとどめている。

調査中、小型コウモリの住処となっていた。



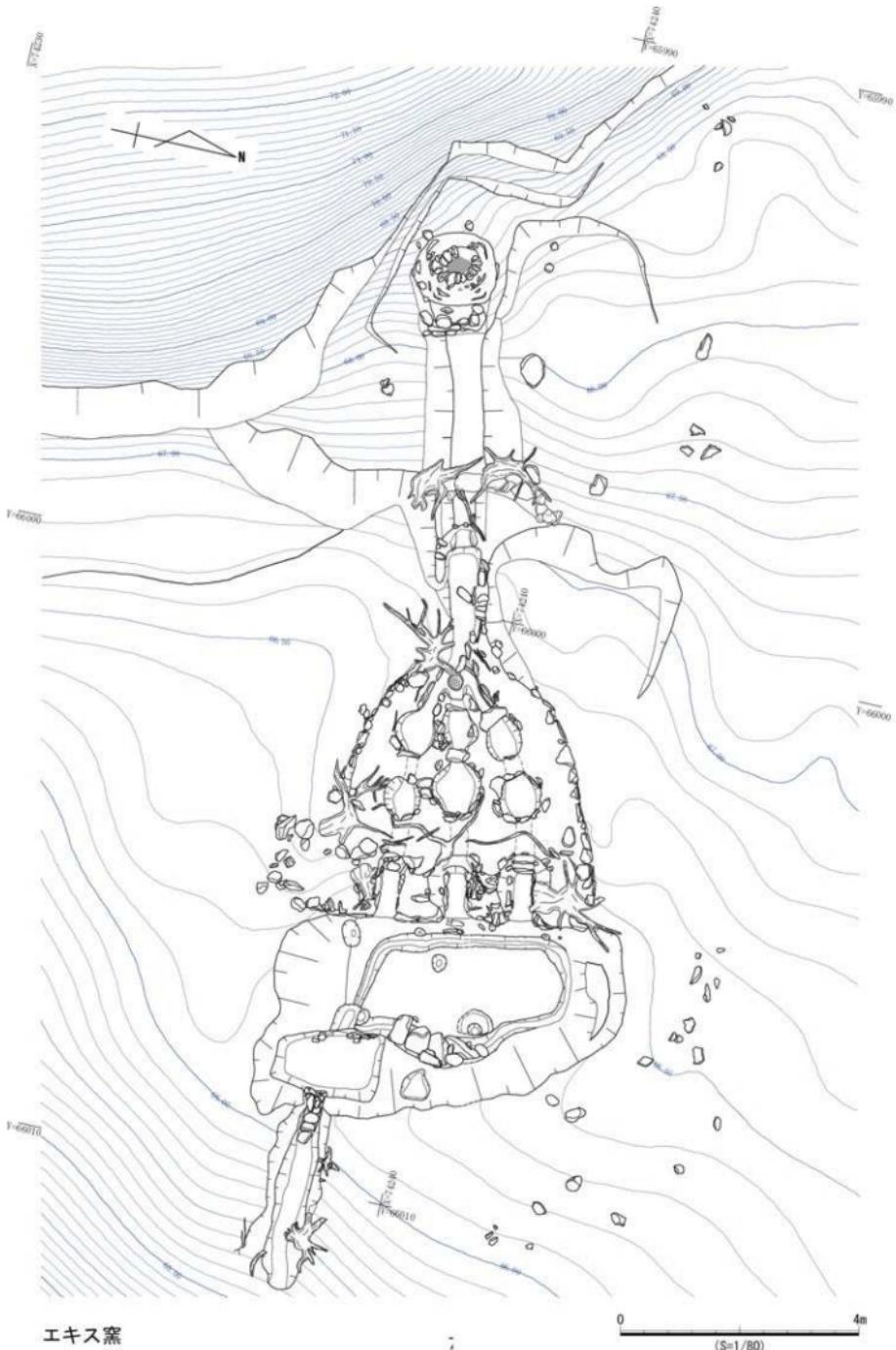
2号炭焼窯 炭化室

中央に溝があり、排水施設となっている。



2号炭焼窯 煙道

3本設置されている。  
細い溝を掘り、石積みで塞ぐ。  
下端に煙りを出す穴が見える。



エキス窯



エキス窯 手前3基の焚口、中央部は6つの開口部（鍋設置）、奥に1本の煙突

## 普天間古集落遺跡ほか

主任 知念 隆博

- 1 調査期間：2009（H21）年7月28日～2009（H22）年3月12日

2 検出遺構：  
○近世から近代：溝跡、方形石組遺構、石敷遺構、ピットなど  
○グスク時代：ピット、土坑、溝  
○縄文時代晚期：土坑など

3 出土遺物  
○近世以降：沖縄産陶器、中国産陶磁器、本土産陶磁器など  
○グスク時代：中国産陶磁器、土器など  
○縄文時代晚期：石器、土器など

4 時代別の概要  
○近世から近代：調査区全体に遺物包含層、ピット、溝跡等を確認し、一部では屋敷跡と考えられる遺構も確認した。また、調査区の西側にピット等の屋敷関係する遺構が少ないとことから、耕作地であった可能性が高いことを確認した。  
○グスク時代：遺構としてはピット、土坑、溝を確認したが、繋がりは不明である。遺物は中国産陶磁器、土器などが少數確認されている。  
○縄文時代：遺物包含層は確認できないが、調査区の一部で土坑などが確認されている。



圖書館所圖



写真1 方形石組遺構検出状況



写真2 溝跡完掘状況



写真3 石器検出状況



写真4 土坑半截状況

# 宮国元島上方古墓群発掘調査の概要

西原高等学校教諭 西銘 章

## 【古墓群の位置】

宮古島は島の周囲が石灰岩の崖になっています。古墓群は宮国集落（旧上野村）東側の崖地帯を利用しています。古墓群の近くには宮国の旧集落である宮国元島遺跡（14～15世紀）があり、ここは1771年におこった明和の大津波で被害をうけ、現集落へ移転したと伝えられています。すぐ近くでは1873年にドイツ商船のロベルトソン号が座礁しました。



## 【調査の概要】

宮国元島上方古墓群は、宮古島市上野字宮国に所在する近世から近代にかけての墓域で、集落東側の崖面と台地上を墓域としています。今回の調査は県道工事に伴って行われた記録保存調査で、平成21年度は10月から12月の2ヶ月間実施しました。調査成果は次のとおりです。

### 1 墓の調査

21年度は台地上にある2ヶ所の墓を中心調査を行い、崖側（20年度調査区の近く）を20号墓、集落近くを21号墓としました。2ヶ所とも墓の移転は済んでおり、墓の持ち主を特定できる遺物はほとんどありませんでした。この墓の特徴は、墓の入り口（墓口）に石積みを設けて墓室を地表よりも1段低くするという点があります。20・21号墓も同じように入り口に石積みを設けています。

20号墓は石灰岩の岩盤が縦穴状に約2mほど落ちこんだ部分を墓にしています。墓を上から見ると縦穴の周辺へ馬蹄形（U字状）に石を積み、大きなテーブルサンゴを取り口の屋根にしています。墓の入り口下側も1mほどの石積みがあります。墓室内は特に手を加えた痕がないようなので自然のままのくぼみを利用したものでしょう。

20号墓の主な遺物は沖縄製の陶器、宮古島製の土器（宮古式土器）で、昨年度の調査で出土したものとほぼ同じです。その他に日本製、中国製の陶磁器がありました。20号墓からは貨幣が数点出土しており、中でも「**大清銅幣**」という中国の清朝末期（20世紀初め）

の貨幣は県内で出土した事例はなく、なぜ宮古島にもたらされたのか興味深い点があります。

**21号墓**は小山状になっている石灰岩の岩盤の横穴を利用した墓で、外見は破風墓のようです。墓室の広さは10m近くあり古墓群の中でも規模の大きな墓です。21号墓は横穴の開口部へ石積みを積み上げて墓口にしています。積んだ石の中には一人で抱えるには大きすぎるほどの重い石もありました。墓口は元はコンクリートブロックで閉じていたようです。ここも墓室内に加工の痕がないことから自然の横穴を用いたものでしょう。

墓の移転は済んでいたようですが、墓室の奥には四肢骨や頭骨を集めています。宮古島では墓へ新たに棺桶を入れるときに前にあった人骨は奥に片付けたそうです。墓にあつた人骨は古いものと考えてそのままおいていたかもしれません。

21号墓の遺物は近代以降の遺物が中心です。宮古式土器が墓の中からみつかっていることから、20号墓と同じ時期から使っていたかもしれません。21号墓外の西側に陶器片や骨などが集められている部分がありました。念のため21号墓の遺物とここの遺物を接合（破片どうしをくっつける）したところ、接合できる遺物が多くありました。そのため、21号墓を移転するときに不用になった碗や細かい骨をここに捨てたのだと思います。

次にそれぞれの墓の時期を考えてみます。20号墓を主に使ったのは近世の後半（18世紀前後）以降が中心でしょう。宮古式土器の中でも15・16世紀ごろのものがわずかにあるため、古い時期（15・16世紀？）から近代まで使っていたかもしれません。21号墓は20号墓と似たような遺物があるため同じ時期から使いはじめた可能性はありますが、主に使っていたのは近代以降（復帰前後まで？）でしょう。

昨年度、一部の墓（古墓群東側の1・2・19号墓）は調査を終えることができなかつたため、引き続き今年度も調査しました。1号墓では墓室の土を岩盤付近まで掘り下げたところ、**イモガイ製ビーズ**が出土しました。2号墓では墓室の石積みを除け土を掘り下げるときシャコガイ製斧が出土しました。その他にも19号墓で用途不明の貝製品、骨製品が出土しました。シャコガイ製斧やイモガイ製ビーズは約2千～1千年前の**無土器期**の遺物ですが、シャコガイ製斧は昨年度の調査や近くの宮国元島遺跡からも出土しています。

このシャコガイ製斧やイモガイ製ビーズについては、昨年度の報告でも（シャコガイ製斧は）無土器期の遺物としました。しかし、石垣島でも似たような遺物がみつかっており、新しい時期（12・13世紀ごろ？）までシャコガイ製斧やイモガイ製ビーズがあったかもしれません。そのため、これらは墓とは違う別の時期の遺物、または墓として使われたころのもっとも古い遺物のどちらかでしょう。

## 2 墓以外での調査

台地上で伐採作業を行ったところ、こぶし大から人頭大の石灰岩を集めた**集石遺構**3ヶ所を確認しました。遺構からは陶器が数点出土しているので、新しい時期の遺構と思われます。

遺構の大きさや形はまちまちで、人の手により石灰岩を集めていることは分かるのですが、集石遺構1とした以外は何らかの目的があったように思えませんでした。

集石遺構1はL字状に石灰岩を並べた部分があり、畑などの境界のようにもみえますが、ここに人が住んだということは聞いていません。そのため、台地上に5ヶ所の試掘坑を設けて調査しました。しかし、表面の土は薄く10～30cmほどで岩盤に当たり、小さな土器片や陶器片がわずかに出土しただけで、建物や畑の痕はみつかりませんでした。

調査区の外に6m四方、高さ1mの大きな石積み遺構がありました。この遺構は工事予定の場所から外れていたため一部の伐採を行ったのみで、どのような遺構か確認していません。もしかすると宮古島の各地でみられる**ミヤーカ**という種類の墓かもしれません。他にも土留めのためと思われる石積みが何ヶ所かありました。

発掘調査で出土した木材の材質分析を行いました。旧上野村では棺（ガイ）にデイゴ（ドウフギ）を使ったとされますが、分析では確認できませんでした（他でもよくつかうスギ

を確認しました)。土器の土を分析したところ、宮古式は古い時期の第一型式と新しい第二型式に分かれますが、土の成分が違うため別の地域で作っていた可能性があるとのことです。

### 【まとめ】

- ① 20号墓は縦穴を利用した墓で、主に近世後半（18世紀以降）に用いた。大清銅幣という中国貨幣が出土した。
- ② 21号墓は横穴を利用した墓で、大きな墓室をもつ。遺物は近現代の陶磁器が多く、主に近世後半から近代以降（戦前？～現代）まで用いた。
- ③ 台地上には集積遺構があり、土器などがわずかに出土している。ただし、この一帯がどんな目的で用いられたか不明。近くに大型の石積み遺構などがある。
- ④ 1・2・19号墓ではシャコガイ製斧やイモガイ製ビーズなどが出土。墓以前か墓に伴うもっとも古い遺物の可能性がある。（昨年度、野城式とした土器は八重山系に訂正。）

【参考文献】 上野村役場『上野村史』(1998年)

#### 【遺跡からみつかるガラス瓶】

近年、発掘調査報告書で近代以降の遺物をとりあげる事例が増えています。新しい遺物は「ゴミ」と思うかもしれません、遺跡（遺構）の時期、遺物の性格を考えるカギにもなります。ガラス瓶から少し考えてみます。

与那国島の嘉田地区古墓群では埋葬人骨のそばにビール瓶がありました。キリンビールの瓶だったことから会社に問い合わせたところ、「昭和9年から14年までつくられたもの」とわかりました。そのため、この人が葬られた（亡くなった）のは昭和9年以降と考えました。

嘉田地区古墓群でみつかったガラス瓶のうち約7割がビール瓶など容量の多い瓶でした。これは「亡くなった方へお酒を供えたものでは？」ということを聞きました。宮古島でも亡くなった方へ酒を供えるほかに、墓の浄めとしても酒を使っています。

宮国元島上方古墓群ではビール瓶にまじって高さが10cm以下と小さい瓶がみつかり、中には3cmと小さい瓶もあります。旧上野村での民俗事例として、亡くなった方への副葬品のひとつに「髪油」があります。小さい瓶はその髪油を入れたものでしょうか。

# 基地内文化財分布調査の成果

主任 中山 晋

## 1 事業概要

基地内文化財分布調査は、平成 9 年度から文化庁の国庫補助事業により実施しており、今年度で 14 年目となる。

本調査は、米軍基地や自衛隊基地における埋蔵文化財（遺跡）の実態把握と、遺跡分布地図等の基礎資料作成を目的としている。

## 2 調査手法

普天間飛行場という広大な範囲において調査箇所の正確な位置を把握するため、あらかじめ 3 段階の地区割を設定し、座標を用いて位置情報を管理している。調査手法は次のとおり。

### （1）表面踏査

実際に現地を歩き、地表面を観察しながら遺物の散布状況や地形等を確認する。

### （2）試掘調査

遺跡の有無を確認するための部分的な発掘調査。普天間飛行場ではあらかじめ設定した地区割に基づき、30m メッシュの交点において実施する。

1 節所あたりの規模は 4m×4m で、原則として重機（バックホウ）を使用して慎重に掘削を行うが、重機を使用できない場所については、2m×2m の範囲を人力により掘削する場合もある。

### （3）確認調査

遺跡の範囲・性格・内容等を把握するための部分的な発掘調査。試掘調査によって確認された遺跡についてより詳細な範囲・性格・内容を調べるために、試掘調査よりも広い面積を発掘する。普天間飛行場では、原則としてあらかじめ設定した地区割にもとづいてトレンチ（溝）を設定し、遺構の広がり、土の堆積状況などを検討して遺跡の範囲などを確定する。

## 3 主な事業経過

平成 9 年度 基地所在市町村における埋蔵文化財把握状況を整理し、報告書を刊行。

平成 10 年度 キャンプ瑞慶覧において試掘調査着手。

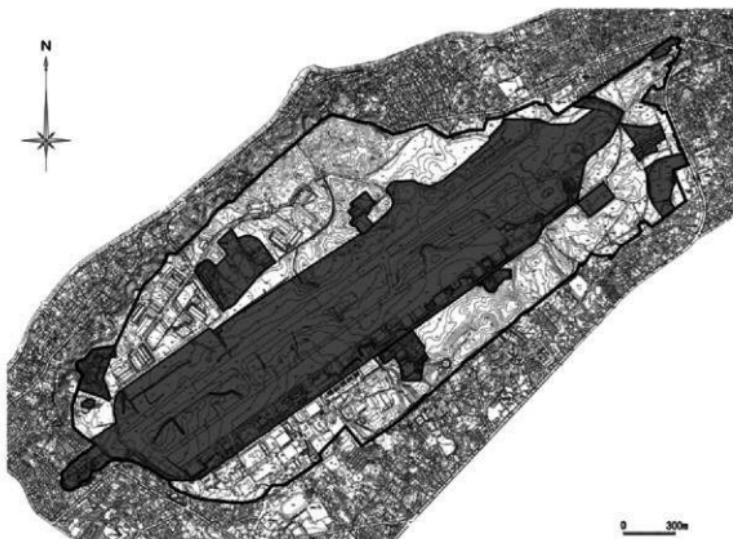
平成 11 年度 キャンプ瑞慶覧に加え、普天間飛行場内においても試掘調査を実施。

平成 12 年度 普天間飛行場内での調査を継続して実施。

平成 13 年度 調査に宜野湾市教育委員会が参加。

平成 20 年度 普天間飛行場内の調査可能範囲における試掘調査は「ほぼ」終了。

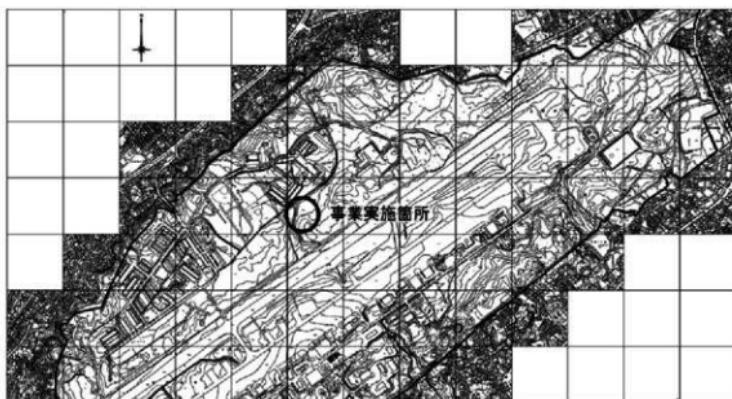
平成 21 年度 平成 20 年度までの調査成果の中間とりまとめを行い、『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』を刊行。



第1図 普天間飛行場と調査制限エリア (2009.8.4現在)

#### 4 平成 21 年度の調査成果

平成 21 年度は、平成 20 年度に引き続き大山加当原（おおやまかららばる）第四遺跡の確認調査を実施する計画となっていたが、立入手続き等の関係で開始が遅れたため、表面踏査、確認調査箇所の選定等を行うにとどめ、発掘作業は平成 22 年度以降に持ち越す事とした。調査期間は 2009 (H21) 年 11 月 25 日～2010 (H22) 年 2 月 19 日の約 3 ヶ月。



第2図 平成 21 年度事業実施箇所



図版 1 調査地域遠景



図版 2 調査地域



図版 3 草刈作業

### 【大山加当原第四遺跡について】

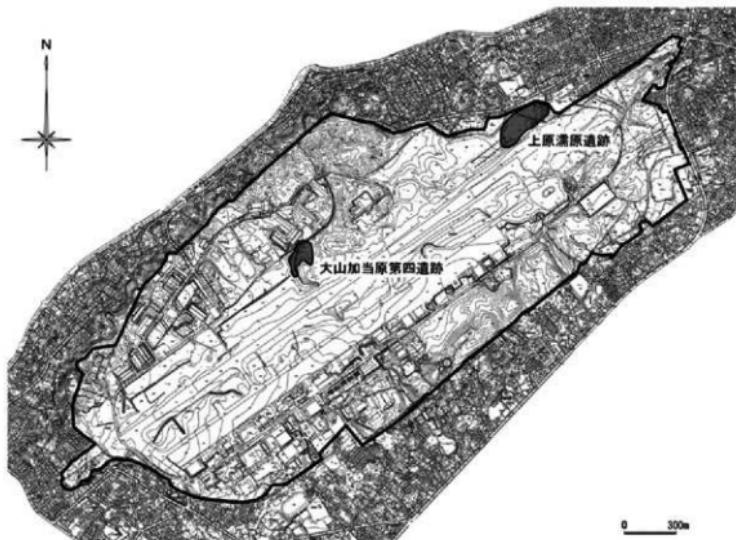
大山加当原第四遺跡は、平成 19 年度に当センターが試掘調査を実施した結果、複数の地点で黄褐色砂質～粘質シルトが厚く堆積している状況が確認され、その中に縄文土器が含まれていたことから新たに追加された遺跡である。

現在のところ、これらの縄文土器を含む土は地山である赤土（マージ）が雨水等の影響により谷もしくはすり鉢状のくぼんだ地形に再堆積したものと考えられ、当時の環境を復元する上で非常に重要な意味を持つ。同様の堆積状況は、宜野湾市教育委員会が調査を行った上原瀧原（うえはらぬいはる）遺跡でも見られる。なお、上原瀧原遺跡は縄文晩期相当期の生産遺跡である可能性が示唆されている重要な遺跡である。

平成 20 年度は、この黄褐色砂質～粘質シルトより詳細な情報を収集する目的で、試験的に小規模（6m×12m）のトレーニングを 2 箇所設け、人力による確認調査を実施した。

2 箇所設定したトレーニングのうち、1 箇所では近世～近代の時期と思われる耕作土と、溝状構造が確認された。さらに、グスク時代のものと思われる耕作土も確認できたが、明確な遺構や遺物は確認できなかった。その後から、目的とする黄褐色砂質～粘質シルトが顔を出したが、時間の都合で一部分のみ 50 cmほど掘り下げた時点での調査を終了した。黄褐色砂質～粘質シルトから得られた縄文土器は小片で 3 点のみであり、極めて少ない。

平成 21 年度は、この黄褐色砂質～粘質シルトの調査を再開するとともに、調査範囲を広げ、遺跡全体の堆積状況を解明するための調査を実施する予定であった。



第3図 大山加当原第四遺跡と上原瀧原遺跡の位置

## 5 『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』について

沖縄県教育委員会と宜野湾市教育委員会は、普天間飛行場内でこれまでに約 1,700 箇所の試掘調査を実施してきた（平成 21 年 3 月現在）。この数字は、普天間飛行場全体で必要となる試掘箇所数のおよそ 1/3 にあたる。

平成 21 年度には、返還前に調査可能な範囲における試掘調査がほぼ終了する計画となっていたことから、沖縄県教育委員会と宜野湾市教育委員会は平成 21 年 5 月に普天間飛行場内の遺跡地図作成及び情報交換等を目的とする「普天間飛行場内文化財調査検討会」を共同で立ち上げた。その中で、平成 20 年度までに実施してきた試掘調査の成果等を参考に普天間飛行場内の遺跡について情報を整理し、平成 22 年 3 月に『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』を刊行した。

検討会での作業を通して、普天間飛行場における遺跡の状況がある程度わかつてきたが、膨大な試掘調査データの再整理や残された課題の解決にはまだ多くの時間を必要とする。

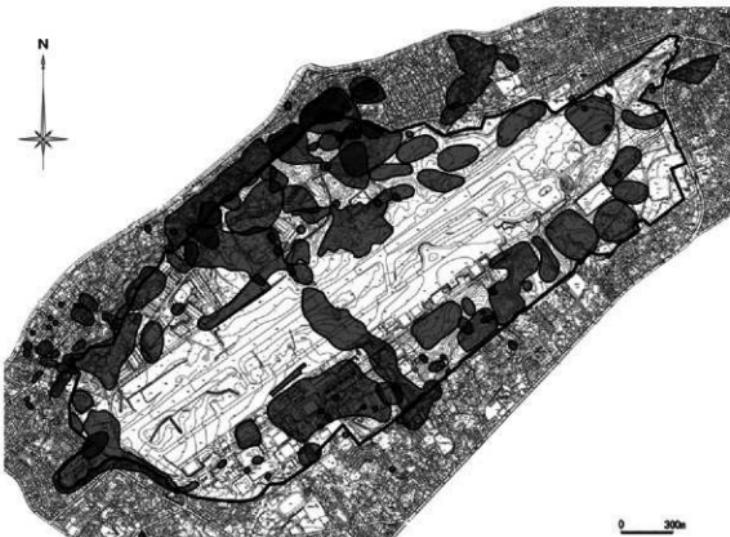
## 6 普天間飛行場内の遺跡

### （1）遺跡の数と面積

普天間飛行場内で確認されている遺跡は 102 遺跡（約 214ha）であり、普天間飛行場の面積の約 4 割を占める。なお、遺跡の面積については、基地の外に広がっている部分の面積や重複している面積も含むため、実際よりは広い数字となっている。

試掘調査が終了したのは全体の 1/3 程度であり、今後の調査進捗により遺跡数はさらに増加するものと思われる。

※普天間飛行場の面積は約 480.5ha



第 4 図 普天間飛行場内及び周辺の遺跡

### （2）遺跡の内訳と分布傾向

『普天間飛行場内遺跡地図（中間報告）』では、便宜的に次の 4 つの時代区分を用い

ている。

「先史時代」…おおむね 12 世紀前半以前

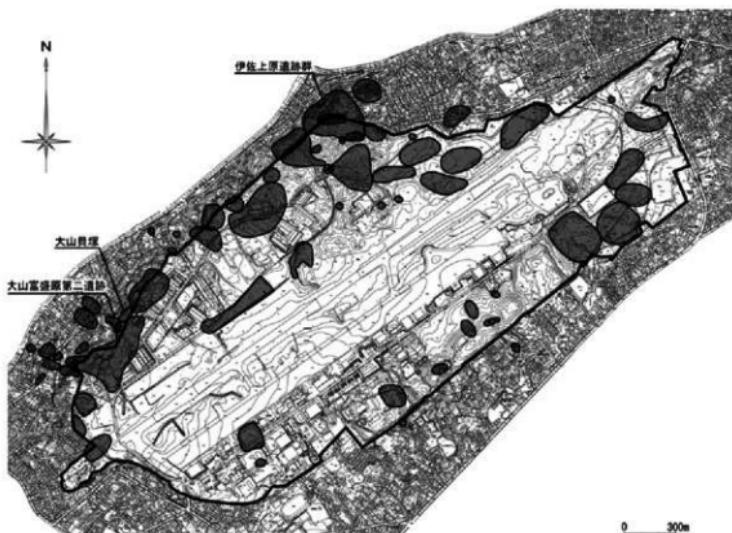
「グスク時代」…おおむね 12 世紀前半～16 世紀

「近世」…おおむね 1609（慶長 14）年～1879（明治 12）年

「近代」…おおむね 1879（明治 12）年～1945（昭和 20）年

①先史時代～グスク時代の遺跡

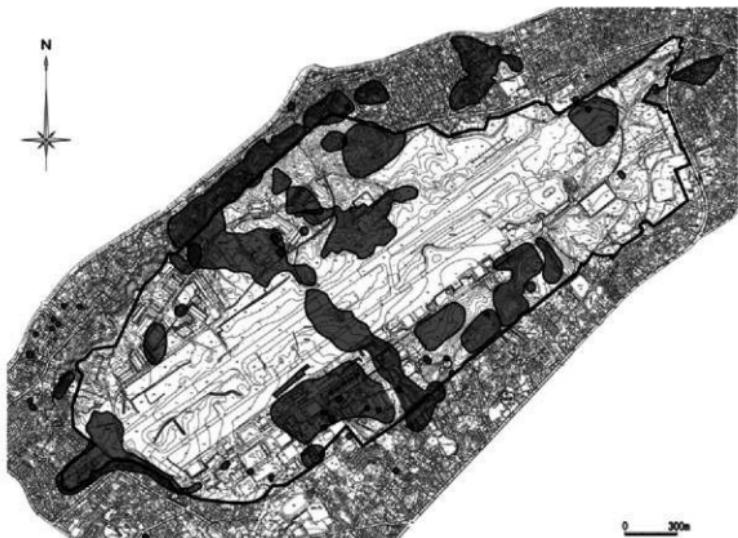
先史時代～グスク時代の遺跡は 55 遺跡で、総面積は約 80ha（遺跡全体の約 4 割）である。当該時期の遺跡は、滑走路を挟んで北西側に多く分布する。特に、普天間飛行場の北西側にある段丘縁辺部には、史跡大山貝塚をはじめ、縄文時代の住居址が確認されている大山富盛原（おおやまとうむいばる）第二遺跡や伊佐上原（いさういばる）遺跡群等、先史時代の遺跡が多く分布する地域となっている。



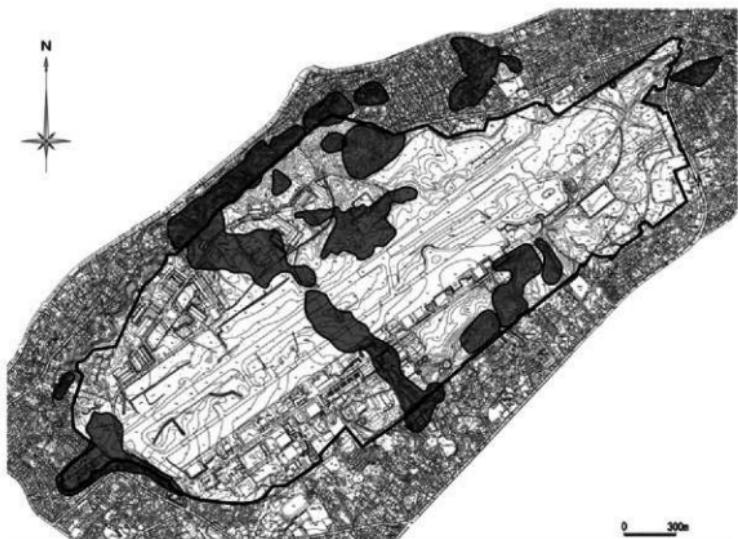
第 5 図 先史時代～グスク時代の遺跡（普天間飛行場内及び周辺）

②近世以降及び時代不詳の遺跡

近世以降及び時代不詳の遺跡は 47 遺跡で、総面積は約 134ha（遺跡全体の約 6 割）である。近世以降の遺跡は、滑走路を挟んで南東側に多い傾向にある。そのうち 14 遺跡（約 96ha）は古墓群である。古墓群の範囲は、点在する古墓を大きなまとまりとして設定していることから、単純に他の遺跡と同様に面積を比較することはできないが、普天間飛行場にある遺跡の総面積の約 4 割を古墓群が占めることとなる。



第6図 近世以降及び時代不詳の遺跡（普天間飛行場内および周辺）



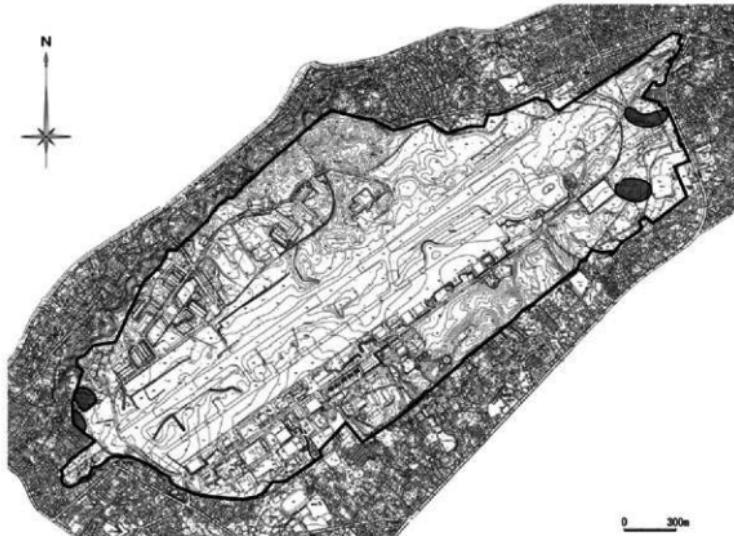
第7図 大きな面積を占める古墓群（普天間飛行場内および周辺）

## 7 今後の課題

遺跡の状況をより詳細に把握するためには、これまでの調査によって判明した様々な情報を加味した上で、過去の試掘調査データの再評価を行う必要がある。そのデータに基づいて、現段階で明確に範囲を分けることができていない遺跡の分割や、同じ遺跡として評価すべき遺跡の統合等を行い、より実態に近い遺跡概略地図を作成することが急務である。

また、現段階で確認調査が完了し、遺跡の種類、時期、範囲、内容等がほぼ確定できた遺跡は4遺跡である。この数字は、順調に調査が進んでいるとは言い難く、今後とも返還前に調査可能な地域にある遺跡の確認調査を推進し、より精緻な遺跡地図を作成するための基礎資料を整えていく必要がある。

返還後には、約7割の未調査地域における試掘・確認調査と跡地利用に伴う本調査（記録保存のための緊急発掘調査）が控えている。それを考えると、返還前に可能な作業は返還前に実施したいところであるが、稼働中の基地であるが故の様々な制約に加え、調査体制の問題等、先に解決すべき課題が多く、非常に厳しい状況に立たされている。



第8図 確認調査が完了した遺跡

## 平成 22 年度発掘調査等予定一覧

遺跡名・調査名	調査目的・原因	調査予定期
県内遺跡詳細分布調査	県内各地域の埋蔵文化財分布調査と基礎資料作り	6月～7月
喜田盛遺跡発掘調査	県道改良工事に伴う発掘調査	7月
国指定史跡円覚寺跡発掘調査	史跡整備に伴う遺構確認調査	7月～8月
白保竿根田原洞穴総合発掘調査	新石垣空港建設に伴う発掘調査	8月～10月
基地内文化財分布調査	基地内に所在する遺跡の把握	10月～2月
首里城公園(中城御殿跡)発掘調査	県営首里城公園整備に伴う発掘調査	8月～12月
首里城跡発掘調査	国営首里城公園整備に伴う発掘調査	9月～1月
海軍病院建設予定地内発掘調査	米軍施設建設工事に伴う発掘調査	8月～3月
宮国元島上方古墓群発掘調査	県道改修工事に伴う発掘調査	9月
戦争遺跡詳細分布調査	重要な戦争遺跡の詳細な遺構確認調査	隨時

# 沖縄県立埋蔵文化財センター行事案内

◎ 9月4日～9月19日 (土)

移動展 **第40回文化調査発掘報告会** 沖縄県立埋蔵文化財センター

【時間】8：30～17：00 (入館は16：30まで)

【場所】今帰仁村歴史文化センター 談話室

【内容】センター設立10周年を記念して、北部地域にて移動展を開催します。

◎ 9月4日 (土)

第40回文化調査発掘報告会  
「歴史～発掘された歴史～発掘されたやんばるの生業」  
なりわい

講師：片桐 千亜紀（当センター）・安座間 充（金武町教育委員会）

崎原 恒寿（恩納村教育委員会）・幸喜 淳（海洋博公園管理財団）

【時間】13：30～16：30

【場所】今帰仁村歴史文化センター 講堂

【内容】北部地域（大宜味村・恩納村・金武町・本部町）の最近の発掘について紹介し、ひと昔前のやんばるの生業について迫ります。

◎ 10月19日 (火)～10月24日(日)

企画展 **『10周年記念文化調査発掘報告会』** 関連開催企画展埋蔵文化財セミナーの歩み

◎ 10月23日 (土)

第40回文化調査講座

『10周年記念文化調査発掘報告会の先史時代～』

講師：安里 嗣淳（元県立埋蔵文化財センター所長）

◎ 11月13日 (土)

第41回文化調査講座

『10周年記念文化調査発掘報告会の後編失原遺跡時代前夜の沖縄～』

講師：知念 勇（元県立埋蔵文化財センター所長）

※行事予定は変更する場合がありますので、開催前にHP等で詳細情報をご確認ください。

## 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7

TEL：098-853-8752 FAX：098-835-8754

HP：<http://www.maizou-okinawa.gr.jp/>